

骨折チーム
立川市立
エリゾン

独自の情報共有システム

タイムリーに的確なアドバイス

小樽市立病院（並木昭 院長・388床）は、院
義事業管理者、有村佳昭 内で多職種による、2次

骨折の予防のための骨折リエンチームを立ち上げた。独自の情報共有システムを導入し、継続フォローを行う一方、将来は地域医療機関との連携を強め、骨粗鬆症予防へと機能を拡充していく考えだ。

同病院では、年間100～1200件ほどの大腿



月1回、チームでカンファレンスを開催

骨近位部骨折の治療を行っている。そのなかで骨粗鬆症が原因となっているケースが多いものの、2次性骨折予防へと介入できた例は15%程度。外

来や手術で多忙な中、医師が積極的に介入するのは難しいことから、チーム結成に至った。

メンバーは、医師、外来・病棟看護師、薬剤師、管理栄養士、放射線技師、理学療法士、ソーシャルワーカー、メディカルク

ラク。骨折によって救急車等で運ばれてきた患

者に対し、各職種が専門性を生かしてアプローチし、患者の既往歴、生活環境、使用薬剤などの情報を収集し、介入を開始する。

チーム立ち上げ後3カ月あまりで23人が対象となり、ほぼ100%、介入することに成功している。対象患者には、入院

中だけでなく、退院・転院後も外来受診時などの際にアプローチ、外来受診がない患者も電話や手紙等でフォローを継続

している。佃幸憲整形外科主任医療部長は「院内

外で長期的に患者と関わる、外来看護師の果たす役割は大きい」と話す。

月1回チームでカンファレンスを行い、情報交換し、介入方法について話し合っているほか、電

子カルテを活用した情報共有システムを開発。職種ごとに随時、患者情報を書き込み、どこでも確認できることで、タ

イムリーに的確なアドバイスができるようになった。さらに定期的な意見を

を出し合い、使い勝手の

向上を図っている。

現在は、大腿骨近位部骨折などで手術した患者を対象とした、2次骨折予防のための骨折リエンサービス（Fracture Liaison Service：FLS）がメインとなっている。市内では高齢

者が増加していることもあり、今後は骨粗鬆症予防や治療をメインとしたOsteoporosis Liaison Service（OLS）へと、活動の

軸を変えていく。「骨粗鬆症について、医療従事者、患者やその家族に正しい知識を身に付けてもらうことが重要」（佃部長）と、

年明には開業医向けの講演会を行う予定。チームメンバーの1人、畑知見外来看護師は、「退院患者の中には、介護施設に入所するケースも多い。介護職員が早期に骨粗鬆症に気が付くことができればサポートしたり、継続ケアへ普段から連携できる体制づくりを進めていきたい」と

話す。